

算数科教育 実技・理論研修会 終了報告

テーマ	課題解決に自ら向かう子の育成 ～数学的な見方・考え方を働かせる学びを通して～
日時	令和6年8月22日(木)
会場	新篠津村立新篠津小学校
講師	加 固 希 支 男 氏 (東京学芸大学附属小金井小学校 教諭)
参加者	80名
研修会の様子	今年度も、昨年度に引き続き、東京学芸大学附属小金井小学校教諭の加 固 希 支 男 氏を講師に招き、新篠津村立新篠津小学校を会場として実技理論研修会を開催することができました。そして今年度は、数年ぶりとなる講師による授業公開(新篠津小学校5年生)、講演会という流れで実技理論研修会を実施することができました。 授業は「単元を通して働かせる数学的な見方・考え方を意識するための単元の導入」をテーマに5年生の算数「図形と角」の1時間目を実践していただきました。授業の中で加 固 氏 は児童が数学的な見方・考え方を働かせるために「三角形の何を使ったの」「どこに着目したの」と何度も問い、何度も試行錯誤させながら、単元の重要なポイントに児童が自ら気づくように授業を進めていました。 こういった、数学的な見方・考え方を働かせるアプローチを続けていくことで、主体的・能動的に学びだす児童の姿を引き出していました。さらに、児童とのやりとりの中で加 固 氏は「正解を求めるのではなく、やってみて違いに気付くことが大事」「失敗するから、いろいろ見えるんだよ」と、教科指導を通して人間教育も同時に進めていることが伝わってきました。 講演会では数学的な見方・考え方を児童生徒が働かせるための教師の最大の役割は、一人一人の思考を価値付け、つなげ、高めていけるよう系統性を意識した授業づくりであると述べられていました。また、単元の導入の一斉授業で単元を通して働かせる数学的な見方を顕在化させ、一斉授業で顕在化させた数学的な見方が使えるかを考えながら個別学習を進めていくことが、個別最適な学びであると述べていました。つまり、個別最適な学びとは単に学習形態を指すのではなく、児童一人一人が数学的な見方・考え方を自由に働かせながら進めていく学習であることがわかりました。 お忙しい中、授業公開や様々な視点からご講演いただいた加 固 氏、授業会場を提供していただいた新篠津小学校の皆様、そして5年生の皆様、遠方よりご参加いただいた多くの方々に感謝を申し上げ、終了報告とさせていただきます。 (石教研算数部会副部長 紺野 丈)